

ライリア ヌール サフィトリ  
インドネシア出身  
東京外国語大学 総合国際学研究科国際日本専攻 修士課程

**懐郷**

私は、2014年の春に初めて来日しました。他のインドネシア人にとっては、海外に住むこと、聞き取れない外国語で勉強することなどに全く違和感がない、あるいはそれが普通だと思う人も多数いるでしょう。しかし、当時17歳だった私には、飛行機に乗ることすら不思議で仕方ありませんでした。その上に、日本に留学するとかなんて、夢のまた夢でした。

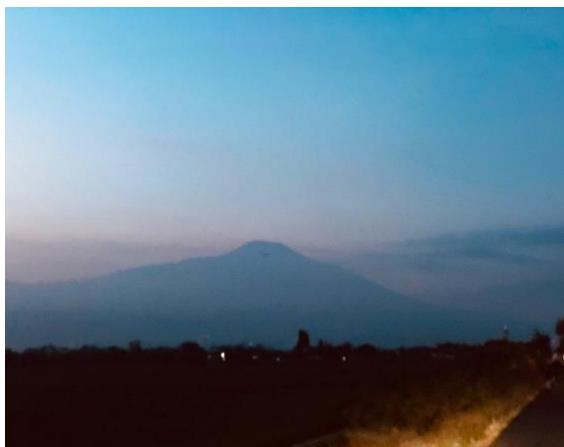
このように、「田舎もん」という言葉をテレビで聞いたことがあります、私もそのうちの一人かなと時々思ってしまいます。

私が住む街は、ジャワ島の中部にあるとても小さな街です。プルヲケルトという街で、山々に囲まれていて、自然にとても恵まれている場所です。インドネシアのジャワ島なんて、栄えている街が多いというイメージがあるかもしれません、実はこういう何もない平凡な街も密かに存在しています。



映画館もショッピングモールもなく、中学生までの一番楽しみにしていたアクティビティー

は、幼馴染の子の家の近くにある、地面がちょっと高い田んぼまで自転車に乗って、小さな坂に登り、そしてその近くの小屋に座り、通りかかった長距離列車を眺めることでした。この列車はどこに行くのだろう、と思いながら見ていました。遠くに行って、色々な人に会いたい、新しいものを学びたいとしみじみ思う日々でした。



高校に上がり、私は毎日自分でバイクを運転して学校に行きました。家から学校まで10分ほどかかりました。晴天の日には、道中に大きい山が目の前に見て、とても壮大な景色を見ながら学校に通いました。その山はとても大きく、今思えば、富士山と似た形の山でした。高校時代の私は、この街が窮屈で仕方がなかったのですが、この山の風景だけは私の毎日の励みでした。「がんばれ」と、「もう少しで遠くにいけるよ」と言わんばかりに、自分のことを応援しているような気がします。

その平凡な日々から、7 年間ほど過ぎました。ついこの間の春休みに、久々に実家に帰省しました。驚くほどに、この街は大きく変化しました。ショッピングモールや映画館、ホテルまで何ヶ所が建ち、車が渋滞している光景もちらほら。とても賑やかで、目が眩みます。遊び場が増えて、アクセスもしやすくなり、とても便利で楽な街になっていますが、私はちょっぴり、寂しい気持ちになりました。

しかし、ふと見上げれば、あの山が相変わらずしっかりと私を迎えてくれます。「おかえり」と言い聞かせるように、小さい時からずっと見てきた風景が背中を押してくれます。何年間も、何十年間先も、辛いこと、悲しいこと、これから先もどこかでまた色々経験するのでしょう。その時には、あの小さな街を、あのたくましい山をきっと思い出すのでしょう。